

学びの多様化学校第1回設置検討委員会 会議録

1 日時

令和7年6月26日(月) 14:00~16:00

2 場所

むつ市役所 議会棟 大会議室

3 出席者

- | | | |
|----|--|---------|
| 1 | ・青森中央学院大学 教授
・県不登校児童生徒支援に関する検討会議会長 | 成田 昌造 様 |
| 2 | ・学び・生かすあおもりグループ 事務局長
・元 青森県立北斗高等学校 校長 | 渡部 靖之 様 |
| 3 | ・前 むつ市教育相談室 教育相談専門官
・風間浦村スクールカウンセラー | 四戸 浩 様 |
| 4 | ・不登校のこと 語り合う会 参加保護者 | 保護者 A |
| 5 | ・不登校のこと 語り合う会 参加保護者 | 保護者 B |
| 6 | ・合同会社 DADAetr
放課後等デイサービス em0 | 佐々木正絵 様 |
| 7 | ・よしのこども円 園長 | 真手めぐみ 様 |
| 8 | ・むつ市校長会小学校部会
・むつ市立第三田名部小学校 校長 | 佐藤 充 様 |
| 9 | ・むつ市校長会中学校部会
・むつ市立大平中学校 校長 | 小原 卓 様 |
| 10 | ・小中一貫併設型学校長
・むつ市立川内小学校・中学校 校長 | 祐川 文規 様 |
| 11 | ・むつ市教育支援センター 教育相談専門官 | 成田 浩之 様 |

・むつ市教育委員会	教育長	阿部 謙一
・むつ市教育委員会事務局	教育部長	福山 洋司
	デジタル教育指導監	濵田 健太
	総務課長	柏谷 圭則
	学校教育課長	石川 穎大
	主任指導主事	木村 浩明
	指導主事	菊池 洋平
	指導主事	氣仙 透

4 報道関係者

・東奥日報社	むつ支局 記者	川越 真也
・デーリー東北新聞社	むつ総局長	佐藤 航
・NHK青森放送局	むつ支局 記者	佐々 文子
・ABA	報道政策局 報道部 副部長	野呂 隆行

5 次第

1) 開会

2) 委嘱状交付（机上配付）

3) 教育長あいさつ

4) 委員の紹介

5) 学びの多様化学校設置検討委員会について

6) 委員長・副委員長選出

事務局案により 委員長 成田昌造氏

副委員長 四戸 浩氏

7) 当市の不登校支援及び学びの多様化学校について

事務局より説明 指導主事 氣仙 透

8) 協議

①学びの多様化学校コンセプト原案について

②学びの多様化学校に期待すること

【成田昌造委員長】

事務局から提示いただいた3項目について協議を進めたいと思う。最初に「学びの多様化学校」について、ご意見を頂きたい。今年度4月段階で全国で58校、むつ市のように独立して設置される学校型で設置するのは22校。いち早く取り組むということは、私は素晴らしいと思っている。

【佐藤充委員】

設置検討委員会ということなので、設置するところからの協議をお願いしたい。私の意見は、学びの多様化学校の設置を積極的に進めていただきたいと思っている。以前、教育支援センターに携わっていた時期があり、保護者から相談を受ける場面があった際に、居場所づくりについてフリースクール等でも地理的な部分も含めていいアドバイスができなかった。行政として、居場所づくりに積極的に関わっていくことが悩みを抱えた子どもたちや保護者の選択肢の一つになる。もっと言えば、子どもや保護者の希望にもつながると考えているので、積極的な設置を進めていただきたい。

【成田昌造委員長】

現場の体験を踏まえて、設置に賛成という意見をいただいたが皆さんいかがか。よければ、ここで出発ということで、拍手で承認していただければと思う。

(拍手多数)

それでは、委員会としては、学びの多様化について大いに賛成ということでご意見申し上げたい。

それでは、ここから事務局から提案された3つの議題について。1つ目は「教育課程の方針について」。教育課程とは、大きいくいえばどう学校をつくっていくかの方針、狭く言えば、どういう勉強をするか。2つ目は「転入学について」どう扱うか。

3つ目は「持続可能な学校運営について」ということについて話し合っていきたい。

【渡部靖之委員】

教育課程の具体的な話に行く前にコンセプトについて共有していくのが妥当だと思っている。私は学びの多様化学校というのは、不登校のための学校ではないと思っていて、今までの学校にはない別の学校、オルタナティブな学校をつくるというのが一番意味があると思っている。そういう学校に行くと自分らしい学びができる、レベルに合わせた学びができる、自分で選択できて、自分で決定もできる。そういう学校をつくりたいのではないかと思っているが、そのあたりを確認したい。その認識を共有しておかないと次のところにはいかないのでないかと思っている。

【事務局：石川禎大学校教育課長】

委員ご指摘のとおり、私たちはそのような学校を目指しており、そういう方向性で話合いが進められて行くことを願っているので、よろしくお願ひしたい。

【成田昌造委員長】

私なりに渡部委員の話されたことについて、事務局提案のスライドからまとめて

みたいと思う。コンセプトの1つ目は、不登校の話もあるが、居場所をつくりたいというのが一番大事。2つ目は子どもたちのやりたいことを応援したいというのが、スライドから読み取れた。3つ目は子供の自己決定権を尊重したい。4つ目は子どもの場合は子どもたちでつくる。5つ目は多様性を尊重する、違いを認め合うという考え方でこのスライドが作られていると思ったが、いかがか。

【事務局：氣仙透指導主事】

そのとおりである。

【渡部靖之委員】

不登校の課題はこれからもあると思うが、今の通常の学校が変わっていければ、全ての学校が全ての子どもたちの居場所になれば、おそらく学びの多様化学校は必要ないと思う。そのためにも学校が変わるための一つの方向性を示す学校であればいいなと考えている。

【成田昌造委員長】

考え方としては、事務局の作ったスライドの5つの点を踏まえて方向性を考えている。ただし、渡部委員が話されたこともそのとおりかなと思っている。現場の校長先生はいかがか。渡部委員の意見に対して、何か頂戴できればと思う。

【祐川文規委員】

我々学校の教員というのは、どうしてもこうでなければいけないという概念がつきまとっているのではないか。そういうものが染みついていると思う。学びの多様化学校が設置されて「あっ、こういうものでもいいんだ」ということを我々教職員が感じる、そういう手立てになることによって、今、現場にいる先生方の考え方、子どもに対する考え方、学校に対する考え方少し変わっていくような気がする。行政主導でこのような学校がつくられることで、我々教職員にとっても変わっていく手助けになるかもしれないと思うので、ぜひ進めていただきたい。

【小原卓委員】

このような子どもたちに合うような環境ができることで、やっぱり子どもたちの可能性が広がっていく。我々教員の方向性や子どもに向ける目も変わっていくと思う。こうしなければいけないなど、その部分も少し変わることで、いろんな意味でいい形になると思う。

【成田昌造委員長】

今までの概念、固定概念にしばられない学校ということで、この考え方のもとに会議を進めていきたいが、いかがか。

(拍手多数)

出発点はそういうことで、情報共有させていただきたいと思う。

それでは、教育課程についてご意見いただきたい。

【真手めぐみ委員】

あなたのありのままを受け入れ、あなたの自分らしさをえがく学校というコンセプトにすごく共感した。こども園でも問題を抱えている子どもは、子ども自身だけではなく、家庭でも生活スキルがうまく構築されていないこともあるので、ゆるや

かな登校時間はすごくいいのではないかなと思った。

【佐々木知絵委員】

障害児支援の観点から、学びの多様化学校の設置には賛成だが、先生方の意欲、技術力、能力が伴わないと素晴らしい内容がもったいない結果になってしまう心配がある。先生方のサポート、さらにその先生をサポートする環境が課題。登下校の時間は案にあったとおりでいいと思う。加えて親御さんへの支援が心配である。

【四戸浩委員】

学びの多様化学校を設置することで、不登校の子どもたちがエネルギーをためて学校に復帰できるというのが一番の目的だと思う。その裏側には、先生方の指導力のことがある。学びの多様化学校で学んだ先生が、そこで学んだことを他の先生方に伝えていくことに期待している。

もう一点は学び直しである。教育支援センターに通室する子どもの保護者に共通している心配は、実は学習の遅れである。学びの多様化学校はその部分を十分支援できる場所ではないかと考えている。時間割など細かい部分はこれから詰めると思うが、賛成である。

【佐藤充委員】

学習指導要領との関係で、例えば特別活動などやらなければいけないものがいくつかあるが、そういうものも含めて特例校としての捉えでよいのか。

【事務局：氣仙透指導主事】

全国で先行して設置された学びの多様化学校では、文部科学省とのやり取りでフレキシブルに対応している。例えば、修学旅行も初めは設定されていない学校が多く、行きたいという子どもの意見から始まったというアプローチが多い。

【保護者B】

いろんな理由はあると思うが、うちの子の場合は引きこもるわけでもなく、家では普通に会話して、ただ何で行けないかも教えてくれない。でも親としては外に出したいという気持ちがあるので、家ではない居場所づくりは、もっと早くつくっていただけたらなという思いはあったが、自分の経験をお話できればと思う。

心配な部分としては、やはり教員の不足、教員の確保だと思う。あとは親の待合室など親のケアについて。子どもと一緒に引きこもってしまう家庭もあると思う。小さい子を家に置いて仕事には行けないので、仕事をやめる方もいらっしゃったりする。そのような親のケアという場所があつたらすごく助かるのではないかと思う。

【成田昌造委員長】

本当に貴重な意見だと思う。学びの多様化学校で東京シューレというところは、保護者に学校に来てもらい、保護者で班のようなものを作り、保護者と子どもたちと一緒に学校をつくっていくということがあった。保護者の関わり方というのは何か検討する余地があるのかなという経験からの意見であったと思う。

【保護者A】

うちの子は教育支援センターに行っているが、そこにたどりつくまでハードルがあり、なかなか難しかった。親の負担に関しても仕事までしばられる。子どもに合

わせて仕事を休むわけにもいかないので、この学校の登校時間はすごくありがたいし、うちの子にも合っているかなという感じもするが、場所が遠い。今は家に近く、自分で通えるが、遠いので送迎になるだろうと思った。あとは、給食は無償化だが、学校に行けていない子どもはどうなのか。加えて現在、学校で実施している健康診断は全く受けられていないので、何か方法はないか。学び直しもその子にあった学び方で実施してほしいと親としては思う。

【成田浩之委員】

3月までの学校の状況を知りつつ、現在むつ市の教育支援センターにいるので、そのことから話したいと思う。教育支援センターに来ている子どもたちは、小学校が3人、中学校が30人だが、どう考えるか。中学生が増えたのではなく、小学校の中學年から高學年に何かしらの予兆がある。それは学びの多様化学校をつくったときに中学校の教員を増やせばいいということではない。居場所の意味をもう一度捉え直したい。そこにただ居るだけの場所という意味ではない。対応できるのかということ。集団の中で何かしようと思うからこそ起きること、これが不登校。集団に自分を合わせて我慢することを、親も学校も祖父母も応援し、プレッシャーになっている。子どもの周辺をしっかりと考えていく必要がある。その部分を間違えるとただ学校があって、学習があって、集団に入れ込んで失敗する学校になる。そうならないために、集団をどう考えるか。個別で何ができるか。

令和9年度に学びの多様化学校ができるのであれば、今からもう学校には風を吹かせなければならない。どんなことかというと子どもを主体にして、子どもにものを決めさせる、子どもに責任をもたせるということを行うことである。

必要なことは教育支援センターが今より充実していくこと、教育支援センターの向こう側に学びの多様化学校の姿があることが一番望ましいと思う。親御さんの話にもあったが、親の思いを考えるとそういう学校は素晴らしいけれど、その陰にはもっと皆さんの力が必要だなと思った。

【小原卓委員】

中学校では特に中学校3年生の後半ぐらいになると進路と勉強のことが出てくる。子どもたちのニーズがどの辺にあるのかというのをしっかりと把握して、それに対応したような個別の支援が必要になるのではないかと思う。そしてその支援のための教材・教具の準備が必要になると思う。

【祐川文規委員】

先生方の立場で話をすると、学習指導要領など国としての枠組みがあり、そういう部分をクリアしていかないといけない。そういう決まってしまっている中で働いている我々もそうなっているというのが、一番の根本なのかと思っている。学びの多様化学校は学習指導要領について、特例で対応できるのであれば、いろいろなことも可能になっていくのではないかなと思っている。

我々が今からやらなければいけないことは校内支援センターの充実ではないかと考えている。現在の学校、川内の子どもたちが果たしてこの学校に通えるかを考えるとそうではないだろう。行ければいいとは思うがちょっと考えにくい。であるならば、その前の段階である教育支援センターの前の段階である校内支援センターがつくられていくというのが一番、最初かなと思っている。

学びの多様化学校に話を戻すと、先生の配置、そのような能力をもった先生、プラスの加配も必要になってくる。そういうところからも考えていいければと思う。

【渡部靖之議員】

まず一つはどのくらいの学校規模になるのかということ。現在の教育支援センターの通所人数から考えても定員を満たすことは難しいのではないか。

もう一つは、集団と個別について。どのくらいの規模でどのように協調性を養っていくのか。また、午前中に一斉授業で、他の個別の指導になると思うが、いわゆる学習の個別最適化のバランスについて。この部分がこの学校の一番のポイントになる。一斉授業よりもむしろ個別のほうが大事なのかなと思う。

教員以外の方の支援も必要になってくる。そして、保護者への支援。保護者に寄り添う手厚い支援が絶対必要だと思っている。

中学生の不登校の問題は、やはり学力の面が大きなネックになっている。北斗高校の校長の時に、不登校を経験した高校生が不登校の中学生たちに話をするという取組をしたことがあった。その時も一緒に来た保護者が北斗高校に来てすごく安心したと話していた。子どもが中学生の時には学校に行ってないので、どこを受検できるのかなど不安がすごくあり、北斗に来てすごく安心したと。やはり保護者の気持ちに寄り添うことが非常に大事であると思っている。

保護者も一緒に学校づくりに関わっていくことが大事だと思っている。三重県の県立の学びの多様化学校（公立夜間中学校と併設）では、保護者が独自のサークルを作っているそうである。

【成田昌造委員長】

ここまでまとめをしたいと思う。むつ市のコンセプトをここでもう一度確認して議論を進めていきたいと思う。いずれにせよ、皆さんからご意見があつたけれども学びの多様化学校の支援の最終的な目的は、学校復帰ではない。社会的な自立。教育課程も学びの多様化学校はかなり自由に組めるということなので、これを取り組もうということをもう一度確認して、皆さんからのアドバイスもいただいているので、それを決めることで検討していくことで次に進みたいと思う。

転入学について。学びの多様化学校には誰が入れるのか。対象者については、市内の生徒、市外の生徒についてどう考えるか、不登校の基準について。文科省の基準で捉えるのか。条件を満たした子どもたちを就学指導委員会で審議するという案を考えているようだが、これについてもご意見をいただきたい。

【四戸浩委員】

むつ市教育支援センターは、町村からも予算をいただいてむつ市に限らず、町村の子どもたちにも支援している。スクールソーシャルワーカーとして関わった経験から、町村も苦労している。通い方等のことについては、様々な検討がこれから必要になってくると思うが、町村の子どもたちを受け入れる学校でやってほしい。むつ市言いながらも下北地区の小中学校であってほしい。これを一番基本に据えていただけないかなと思っている。

【事務局：氣仙透指導主事】

ニーズについては認識している。設置検討委員会の意見を持って、おそらくもっと上席のレベルで議論していくと思う。先行事例から、宮城県白石市の学びの多様化学校は市内から遠いが、通えるなら行きたいということで多くの子どもたちが来ている。

【事務局：福山洋司部長】

一つ皆さんの頭の中で考えてほしいことは、定員を設けようと思っている。むつ市以外に広げたときに、町村の子が入ってきて、定員が埋まったときに新たにむつの子が入れないという状態を我々は一番危惧している。皆さんの意見をお伺いしたいということなので、まず、我々が少し心配しているということをお伝えしたい。

【成田昌造委員長】

スライドにある三つの条件に合った人を就学委員会で判断するという方策を考えているが、これについて意見はないか。

【成田浩之委員】

対象者の条件で、不登校と不登校傾向とあるが、数字で明確なのは30日以上の欠席である不登校だが、この辺は具体的にどうなのか。

【事務局：氣仙透指導主事】

不登校と言い切ると年間30日で切られる恐れがあるため、30日休んでいなくともこの学校に通った方がいい子どもも、もしかしたらいるかもしれないという可能性も含めて、柔軟に対応するため、このような表現にした。

【成田浩之委員】

不登校傾向がない子どもが希望した場合には、入れないということでいいか。

【事務局：氣仙透指導主事】

そういう性質を持った学校ではないので、そこはこだわりたいと思っている。

【四戸浩委員】

学校と教育支援センター、多様化学校と三つがあるけれども、不登校傾向があっても学校で十分やっていける。対応できる。保護者によっては、多様化学校よりも教育支援センターがいいなど、いろんな考えが出てくると思う。今の現実は、市民の皆様に周知されていないこと。この機会に一体それがどんな働きをしているのかを周知していくことも合わせて必要だと思う。就学指導委員会も学びの多様化学校への転入学が適しているかどうかだけでなく、この状態なら教育支援センターが最適というような働きかけも必要ではないか。

【事務局：氣仙透指導主事】

おっしゃるとおりで、記者会見以降、市民から一番寄せられている質問が教育支援センターと多様化学校は何が違うのかということ。やはり私たちはこの部分を丁寧に説明していかなければならないと思っている。現在、教育支援センターで学校復帰に向けてエネルギーを蓄える活動をやっているが、この支援でも学校復帰は難しい。でも少人数なら通える子どもの選択肢として学びの多様化学校があることを市民や不登校の家庭に伝わるような周知の仕方が大事だと思っている。

【成田浩之委員】

教育支援センターに登録している30人のうち、実数では10人しか来ていない。学校にも行かないし、教育支援センターにも行かない。その後、例えば学びの多様化学校に行きたいと言えば、教育支援センターは何も関与していないけれど、審議

の中では認められるということで、かなり難しい議論になると思う。

【事務局：石川禎대학교教育課長】

学びの多様化学校では体験入学を1～2週間考えている。体験することで、教育支援センターより学びの多様化学校の方が自分は合っているなど判断できる。現在、教育支援センターに登録したけれども行っていない20人の中にもそのようなケースがあるかもしれない、体験入学と保護者面談をして、就学指導委員会等で判断していきたいと考えている。

【成田昌造委員長】

他県でも就学委員会という名称を教育指導委員会、教育支援委員会というように名前を変えて、特別支援学校に行く判断をする機関と異なる名称にしている。就学指導とともに、いわゆるカウンセリング機能をもたせるというものが多くなってきている。

【事務局：氣仙透指導主事】

他の自治体でもプロセスを大事にしているというのを伺っている。まずは、本人と保護者にこの学校だったら行けるかという気持ちを聞く。次に2週間の体験入学をする。この時点で難しいとなる例もかなりあるということである。体験入学を経て、再度、本人と保護者と面談をしてこれならいけそうだとなり、やっと就学指導委員会になるということなので、このプロセスが大事になると思っている。

【成田浩之委員】

整理して考えてみると、教育支援センターは学校とベクトルが合っていて、教育支援センターへの出席が学校の出席になるという捉え方であり、どちらかといえば小中学校と一緒にやっている。小中学校から相談があれば、相談を受け、入所するかしないかは次の段階になる。私は、相談はまずあるべきだと考える。

学びの多様化学校は、その学校の中で授業も行い、出席も在籍校が変わるので、全部そこでパフェクトになる。その大きな違いがある。教育支援センターにしっかりと相談したうえでやるのであれば、その先に就学指導委員会、推進委員会のようなものがあつてしかるべきだと思う。

【祐川文規委員】

以前に教育支援センターで働いたことがあるが、その当時のことを思い出して考えると、学びの多様化学校に通える子どもはどういう子どもなのだろうと思う。今まで関わってきた子どもたちは、最初は家から出るまでが大変で、教育支援センターに來るのも大変。教育支援センターで続けていくのも大変。何が大変になっているかというと子どもにエネルギーが本当にない。親御さんが働きかけてエネルギーを蓄えて、教育支援センターへ通えるようになって、そこでもエネルギーを失わせないような対応を一生懸命考えて、学校復帰を目指していた。そのようなことを考えると、学びの多様化学校に通える子どもは、元気が蓄えられてはじめて学びたいと思える状態になるので、その判断ができる期間がまず必要で、その判断基準もハードルが高すぎると足を運べなくなる原因になってしまふ。きちんとカウンセリングをして親御さんや子どもと話をできた上で入学、在籍変更ということをすべきだと思う。そして、そうなったときに、どのくらいの子どもたちが集まることができるか、それはそれで少し心配なところではある。

【事務局：氣仙透指導主事】

他の自治体の例でいうと、開校1年目は、定員は設けるけれどもスマールスタートが多い。定員が満たない状態で、少人数でスタートする。口コミで広まり、先生方の資質が高まり、だんだん増えていくことが多い。担当としてはおそらく、スマールスタートになると思っている。

【成田昌造委員長】

就学指導委員会の在り方など、もう一度さらに整理していただくということで、方向性は見いだせたのかなと思う。

3番目の持続可能な運営のためにということで、基金をつくるという話についてご意見を頂戴したい。

【事務局：氣仙透指導主事】

教育支援センターでは、お金の寄付はないが、市民の皆様から図書や油絵のセットなどいろいろなものをいただいている。

【成田昌造委員長】

市民が支えるイメージや社会教育で支えるイメージなど、いろいろあると思うがこのことについて何かご意見はないか。

【渡部靖之委員】

不公平感が出ないか、あくまでも公立の学校なので。校内教育支援センターや教育支援センターに使うのはいいと思う。学校で言えば横並びなので、そこはちょっと大丈夫かなと思う。

【事務局：氣仙透指導主事】

一例として基金という話だが、例えばふるさと納税でやっている学校や自治体もある。他にクラウドファンディングという手もある。お金ではなく、市民から物品をいただくという寄付の仕方をとっている自治体もあるので、検討させてほしい。

【成田浩之委員】

環境はすごく大事。校内支援センターをつくったときに何も変わらないのかなと思ったけれど、結局、絨毯やソファーを敷いたら、親御さんが相談に来たときにすごく、話やすく、入りやすいと言われた。比べると普段の相談室は、刺激がないのはいいが、殺風景すぎて温かみがない。そう考えたときに、同じ横並びの学校ではあるけれど、いろんな地域で生活している子どもたちを抱えるということを考えると、逆にモデル校になるべきである。それをしっかりと理解してもらえれば。

【成田昌造委員長】

今の成田委員の発言をまとめとして、たくさん取り組んでいただきたいということをまとめたいと思う。

それでは、頂戴した協議事項の最後、今後の検討事項について、今後委員会でこういうことを話し合った方がいいのではないか、何かご意見はないか。

【真手めぐみ委員】

全国54の学びの多様化学校内での不登校率や、やめてしまったなどのデータは

あるのか。

【事務局：氣仙透指導主事】

やめてしまったというデータはない。出席率は、宮城県の白石で7割から8割でスマートスタートとして、今は8割から9割。他の学校も7割から8割と聞いている。

【成田昌造委員長】

社会教育、学校以外と地域とどう連携していくかということにも議論する必要はあると思う。開校予定の場所は伝統芸能など様々ある地域なので、地域と関わりをつくり、学校だけで完結するという発想ではなく、そこを気にする必要があると思う。

【佐々木知絵委員】

地域でどのようにチームワークでそのような子どもたちをサポートしていくのか。私たちは障害者支援事業所、放課後デイサービスとなっているが、あくまで障がいの診断を受け、サービス受給に認定されたお子さんを受け入れている。大体10時から17時までの受け入れは可能だが、そういった子どもたちの居場所ということでは一つでもある。例えばどこにも行けない子がどうするのかとなったときには、障がいがあれば私たちが行けるようにサポートするなど、そのような連携もあっていいと思う。そういう意味で、トータル的に地域のチームワークがあってもいいのかなと思うがいかがか。

【事務局：氣仙透指導主事】

今後の検討課題だが、不登校だけではなく、それぞれの機関がバラバラにやっているというのが、どの問題でも共通したことだと思う。その部分も検討していくたい。

【成田昌造委員長】

皆さんの御協力に感謝する。大変貴重なご意見で、第2回の検討でも続けて協議させていただきたい。

9) その他

①渡部委員からの情報提供

- ・あおもり学び直しスペース（自主夜間中学）“あおも・リラ”について

②事務連絡

10) 閉会